

ヒントは「日常的」

昨日、ある地区の会議にお邪魔して、あいさつと北中の状況報告をさせてもらいました。司会の方の計らいで、最後に参加者から私への質問の時間が設けられました。その時に、次のような質問がありました。

「以前は、この地区から自転車で通学する生徒がたくさんいたが、今はほとんど見かけない。どうやって通学しているのですか。」

今朝も横断歩道脇に立っていると、いつも散歩に来られる方に尋ねられました。

「学園台の生徒さんは少なくなっただけですか。前は、学園台の生徒さんたちがこの時間にたくさん通っていかれましたが。」

やはり地域の方々は、よく見ていてくださっているのだと改めてわかりました。中学生と地域の人の間には、直接的な関わりがないように思えますが、いつも目にする光景が見られなくなったということが、地域の方々の気がかりの種になっているようです。私がお会いたした人たちは、ほんの一部の人たちです。口にはされないですが、同じことを感じていらっしゃる方は、私たちが思っている以上に多い気がします。

本日午前中に参加した地区の会議では、質問ではありませんが次のような意見が出ました。

「現在の状況（コロナ禍）では、中学生だけでなく小学生の姿を見ることもずいぶん少なくなりました。そんな中、（地区の）文化祭で数名の中学生の姿を見て安心しました。」

生徒の皆さん、この意見を知ってどう思いましたか。「地域を大切にする」「地域に貢献する」「地域に感謝する」などと言葉でいうのは簡単です。しかし、具体的にはどうすればよいのでしょうか。現状では、地域の依頼に応えて、地域の中で目覚ましい活躍はできません。大杉再生支援や、「プロジェクトf」で取り組んだような、手間と時間のかかる大きな取り組みは何度もできません。もっと日常的なことで、地域と関わり、地域の人たちとつながることが必要だと私は思います。

三年生の卒業まで、およそ一か月となりました。今年「プロジェクトf」をリードし、地域貢献の一つの形を示してくれた彼らの実績に感謝するとともに、二年生には地域貢献の新しい形を期待します。その時にヒントにしてほしいのが、「日常的」という言葉です。大きく構えなくても、周到な準備をしなくても、地域とフランクに関われる方法……それをぜひ追求してください。

久しぶりに言います、「現状維持は後退」です。今年度を繰り返し返すだけでは、先ほど示したような質問が来年度も生まれるでしょう。したがって、今年度の取り組みとは一味違う味付けを期待します。三年生の業績の上に、更に新しいものを積み上げてくださいね。特に、二年生の皆さん、よろしくたのみますよ。（二月八日記）